

レーザーコンパス

心機一転

藤澤 彰*

Akira FUJISAWA*

昨年から今年にかけて、我々の身のまわりには目まぐるしい変化が顕れた。激動の昭和は平成の時代へと移り、二十世紀も最後の十年を残すのみとなった。特に東欧の政治情勢の変化は激しく、ベルリンの壁の崩壊がこれほど早く到来するとは予測し難いことであった。

私事で恐縮だが、昨夏、三十有余年間勤務した防衛庁の研究所を退職し、シャープ株式会社技術本部に移籍した。職場は国立研究機関から企業の研究所へと移り、生活も交通至便な東京、世田谷の自宅から歴史色豊かな奈良県天理地区の社宅へと移った。レーザー研究に限って云うならば、高温燃焼ガスを超音速ノズルで断熱膨張させ、高エネルギーレーザーを得るガスダイナミックレーザーや、高速目標を精密に追尾するレーザーレーダーの研究から、量子井戸構造の微細なレーザーダイオードや、超高密度記録を行う光磁気ディスクへと変った。このように、私個人にとっても極めて変化の多い年であった。

防衛庁の研究所（正確には技術研究本部）は他の国立研究所と異なる点を敢えて上げれば、目標を定めたシステムの開発プロジェクトを数多く抱えており、その点では企業の研究開発部門と類似している。しかし、研究段階から実用段階に至るまでには、各ステップ毎に種々の試

験評価が行われ、通常の場合、十数年の歳月を要する。企業の場合、遥かに短期間で完成させ、販売実績を上げることは当然であり、正に時間との戦いであり、また、アイデアの勝負であると云えよう。そのため、企業の研究者は短期決戦型とならざるを得ない。しかし、その反面、成果を自分の目で確かめられると云う点で恵まれている。防衛技術研究を遠洋漁業に例えれば、民需品の研究は活魚を扱う近海漁業と云えよう。しかし、企業においても戦略的商品を生み出す未来技術の研究に対する投資も盛んで、若き研究者の意志の尊重、研究環境の整備、国内外への留学等の人材育成など、私の予想を遥かに上まわるものである。防衛庁において予算獲得や組織改編に時間と労力を費して来た過去の経験を振り返ると、企業研究所の方が恵まれているように思われる。

当地は大阪や京都に近く、近畿学研都市にも隣接している。道路整備は充分とは云えないが、交通ラッシュも少く、休日には古都の香りや近畿近傍の風物を楽しむに格好である。会議等で東京に行く機会も多く、東京一極集中の傾向は無しとは云えないが、近畿地区には大学はもとより、ATRやイオン工学研究所等の官民共同の研究機関も多く、研究開発に対する活力を感じる。関西新空港の建設も進み、リニア新幹線

* シャープ株式会社（〒632 天理市樺本町2613-1）

* SHARP Corporation (2613-1 Ichinomoto-cho, Tenri, 632)

の予算も現実化した今日、国際的にも当地域の果す役割りは大きいものと思われる。

先日、東京の晴海ではレーザー学会年次大会が5会場で盛況に行われた。懇親会も懐しい方、珍しい方など多彩な方々が多数集まり盛り上りを見せた。最近の技術推移を見るに、超LSI技術、ハイビジョンに見る画像技術、衛星通信・

放送やデジタル通信ネットワークに見る情報化社会の進展ぶりは目を見張るものがある。レーザー研究も日進月歩であり、各分野で進歩は見られてはいるが、更に、ベルリンの壁の崩壊に匹敵する進展を目指し、心機一転、会員諸氏の御活躍を期待したいものである。